

文脈における特定性

エリック・ロング

「特定性」に関する研究は、従来、英語など定・不定冠詞のある言語を中心に行われており、その中で、定・不定表現の意味論的、語用論的特徴も明らかにされてきた。一方、日本語の文法には「定・不定」の区別を明示する専用の文法形式はないが、さまざまな手段によって、「定・不定」に相当する情報が得られる。その一つに、一般的な意味を持ちながら、専用的に特定のものを指し示す名詞群がある。特に犯罪事件に関する文章に「現場」「遺体」「犯人」といった「特定的名詞」の使用が目立つ。

本研究では、新聞の事件記事や推理小説から得られた文章データをもとに、「特定的名詞」の使用例を分析し、文構造と談話構造のそれぞれのレベルにおいて、使用にどのような制限があるのか考察する。さらに、言語間の普遍的な「特定性」という概念の枠組みに、このような名詞をどのように位置付けたいかを探る。

「特定性」という文法範疇

「特定性 (定不定・definiteness)」は英語などの文法的なカテゴリーで、主に定冠詞の *the* と不定冠詞の *a* によって表現されると広く知られているが、日本語には定・不定冠詞に対応するものは存在しない。この研究では、特定性というカテゴリーの認知的内容をどのように捉え、その内容がどのように日本語で表現されるかを、先行研究を踏まえて考えたい。

「特定性」を文法的かつ体系的に捉える近年の研究では、Lyons (1999) は重要なものである。Lyons によると、特定性は名詞句の属性で、名詞句の指示対象が聞き手 (あるいは読み手) にとって特定可能であることを示す基本的な役割を持っている。指示対象が特定可能だというヒントをあたえられれば、聞き手は既知のものなかで、もっともらしく結びつけられそうなものを、自分の環境や記憶から検索し、対象を特定すればよい。一方、そのヒントがあたえられなければ、聞き手は検索せずに、指示対象がない、あるいは、指示対象が未知のものとして処理すればよいと分かる。

ここでまぎらわしいのは、話し手が自分にとって特定なものに言及するつもりでいても、聞き手の方がそれを既知のものと結び付けられないと判断される場合、普通に不定表現を使うということである。

英語の特定性を表す手段には、Lyons は次のような表現を挙げる：

- | | |
|----------|---------------------------|
| (1) 冠詞 | <i>the dog</i> |
| (2) 指示詞 | <i>this dog</i> |
| (3) 固有名詞 | <i>Ralph</i> |
| (4) 所有詞 | <i>my dog, John's dog</i> |
| (5) 代名詞 | <i>he</i> |

冠詞のない日本語には、(2)-(5)の他に、主題を示す「は」(Lyons 1999: 232-233) と、主語や目的語な

どが省略される場合のいわゆる「ゼロ代名詞」(Tawa 1993)により、指示対象が特定可能であるという情報を表すことができる。しかし、特定性が明確に表示されない名詞句も多いので、発話の環境や文脈、あるいは特殊な語彙などをたよりに特定性を判断しなければならないことがしばしばある。

以下では、特に語彙の使用が特定性の判断に、どのように寄与するかを探ってみたい。

認知レベルと特定性

特定性を文法的に考えると、定・不定という二分法になる。ところが、日本語で特定性の表示が義務づけられない以上、英語の特定性を日本語にあてはめて考えることが困難である。

そこで、語用論的に特定性を捉えるには、聞き手の認知状態をより細かく記述する必要がある。Gundel 他 (1993) などの提案する「認知レベル (cognitive status)」が参考になる。Gundel の理論では、話し手は聞き手の認知状態を推定し、その状態に合う表現形式を選択する。Gundel は、六つの段階を提案する。最下位の段階「タイプ特定可能」から最上位の段階「焦点化」へと連続する。

タイプ特定可能 (type identifiable)	a N <i>I wish I had a dog.</i>	φ N 犬がほしい。
指示 (referential)	“this” N <i>I saw this dog the other day.</i>	φ N この間(ちょっと変わった)犬を見た。
特定可能 (uniquely identifiable)	the N <i>Beware of the dog.</i> (犬が見えない庭の 柵に付けられたサイン)	φ N 犬にご注意。
既知 (familiar)	that N <i>Did you see that dog there?</i>	ano N あそこであの犬を見た?
活性化 (activated)	HE, this, that, this N <i>Have you seen this dog?</i> (写真を見せ ながら)	kare, kore, sore, are, kono N sono N この犬を見たことある?
焦点化 (in focus)	it <i>It's in the backyard.</i>	φ 裏庭にいる。

Gundel 他 の枠組みでは上位の段階は下位を包含するという。たとえば、「指示」のレベルが当てはまるものなら、「タイプ特定可能」も当てはまるということになる。さらに「焦点化」のレベルが当てはまれば、すべてのレベルが当てはまるということになる。

英語では、定表現を使うかどうかは、表に示される認知レベルによって条件付けられる。つまり「特定可能」というレベルが当てはまらなければ、原則として不定表現を使うが、当てはまる場合は定表現を使う。さらに「既知」以上のレベルが当てはまってくると、さまざまな定表現の形式が可能になる。ただし、発話の内容によって、「より下位のレベルの表現」を使うという選択肢もある。

上の表から見られるように、日本語では「特定可能」というレベルを明確に表す表現はないが、「既知」以上のレベルでは、英語と日本語の間に対応する形式がさまざま存在するようである。

Gundel 他 (1993: 291) はさらに四つの言語の調査の結果を提示する。調査では、文章と会話のサンプルの中の個々の名詞句を分析し、認知レベルと表現形式の関連を求める。日本語の場合は下の表の結果が得られた：

タイプ特定可能									44
指示									45
特定可能									71
既知						1	1	1	17
活性化	1		1	1		7	15	1	32
焦点化	87	4	1			1	18		14
	φ	kare	kore	sore	are	kono N	sono N	Ano N	N

ここで注目したいのは、単独の名詞がすべてのレベルで使われるという結果である。

同じ指示対象を同じ表現で表しても、認知レベルが異なる例に、今回調べた文章からの用例を下の表で挙げる（内田1992: 302；訳は Selis 1994から）。「路地」への初めての言及はこの部分の最初の文である。

<302> 木下を①路地に引っ張り込むと、角から顔だけ出して老人の様子を窺った。	(216) He pulled Kinoshita into <u>an alley</u> , from which they peeked around the corner to watch the old man walking on ...
木下が呆れた声を出して、②路地から出ようとするのを、 said Kinoshita, bewildered, starting to leave <u>the alley</u> .
「まずいな」竹村は③路地の奥へ走った。	“Uh-oh!” said Takemura, and dashed further into <u>the alley</u> .

①は「路地」への最初の言及なので、「指示」のレベルは当てはまるが、「特定可能」ではないはずである。②と③では、読者の意識に路地のことが残っているはずなので、「活性化」のレベルまで当てはまる。日本語の方はこの二つのレベルが同じ形式になるが、英訳の方では「指示」と「活性化」の違いに a と the の使い分けが対応する。

59ページあとで、また同じ路地に言及される：

<361> いつか竹村と木下が隠れて野矢桂一の様子を窺ったのと④同じ路地の角で、男が張っている。	(254) At the corner of <u>the same alley</u> where he and Kinoshita had concealed themselves to watch Keiichi Noya, there was a man standing in the shade of a telephone pole, watching Tachibana's apartment.
--	--

④は「既知」に当てはまるが、もとの路地のことを読者の意識に呼び戻すには、特殊な表現が必要である。ただし「……同じ路地」というような形式は Gundel 他 (1993) の分析の対象とならないので、このような用例をどのように扱ったのかは不明である。

単独名詞と特定性

Gundel 他 (1993) の認知レベルは示唆的であるが、「特定可能」と「既知」のレベルにはさまざまな状況が考えられるので、さらに洗練された認知状況を捉える枠組みが必要となる。さらに、形容詞の使い方など、さまざまな表現形式を視野に入れる必要がある。

本研究は、名詞の種類によって、どのように特定の可能性を示唆することができるかを注目する。

まだ最初の段階ではあるが、内田（1992）と松本（1957）において特定のことを指す名詞とその英訳を調べた。両者が推理小説で、「殺人事件」と「情死事件」というフレーム（Fillmore 1982）が中心にある。このようなフレームでは「現場」「遺体」「犯人」といった名詞の指示対象が常に特定可能である。英訳と比較すると、とくに「現場」と「犯人」にさまざまな訳がなされている。これから検証する仮説として、定冠詞のない日本語では、文体とジャンルによって、特定性をはっきり表示得る「現場」と「犯人」を頻繁に使用する傾向が生じるのではないか、というのが考えられる。

下の表の、内田（1992）からの例では、「現場」はすべて、最初の遺体が発見された「死体遺棄現場」を指示する。

<p><50> キャンプ場事務所からの連絡で駐在が駆け付け、女子大生の案内で事務所の男二人も一緒に現場へ向かった。最初は逃げ腰だった女子大生も、警察官の姿を見て気丈さを取り戻したらしい。</p>	<p>(41) Contacted from the campground office, the local patrolman rushed there. Reassured by the sight of him, the girls managed to collect themselves after their headlong flight and lead him and the two men from the office back to <u>the scene</u>.</p>
<p>現場のかなり手前で駐在は皆を止め、そこから先は一人で進んだ。用心深く警棒を突き出すように構えながら近付き、</p>	<p>Some distance before they reached <u>the body</u>, he stopped everyone, then went on alone, his billy club at the ready.</p>
<p><51> 「戸隠村今井の現場へ向かっている全捜査員に伝えてもらいたい。現場に到着後、遺体に近付かないで待機し、現場の保存に留意するよう。私と竹村警部の到着まで現状のまままで待て」</p>	<p>"Get this to all investigators headed for <u>the scene</u> in Imai, Togakushi Township. When they get <u>there</u>, they are not to approach the body, but are to see to it that <u>the area</u> is not disturbed. Under no circumstances is anyone to do anything until Inspector Takemura and I arrive."</p>

「死体遺棄現場」という意味で、「現場」のもっとも一般的な英訳は *the scene* となるが、文体によっては同じ表現を繰り返し使用することを避けるという傾向が見られる。死体が発見されたというフレームが成り立つと、発見された場所への最初の言及でも、「現場」といえばすぐにその指示対象が特定できるのである。さらに「遺体発見フレーム」が有効である限り、「現場」という表現が繰り返し使われるという現象がしばしば見られる。他の現場と区別する必要が生じない限り、「この現場」というように、指示詞などで限定し、特定しやすくすることはまずない。「死体遺棄現場」という意味では、「現場」のもっとも一般的な英訳は *the scene* となるが、文体によって同じ表現を繰り返し使用することを避けるという傾向が見られる。そこで *the* を使った他の表現の使用により、「遺体発見フレーム」との関連を明確にすることができる。

さらに内田（1992）からの「犯人」の例を見よう。

<p><120> 「そのようなこと、あろうはずがないでしょう。無用な詮索はお止めになって、早く犯人をお捜しなさい」</p>	<p>(90) "My husband could have had no reason for suicide, and I suggest that you stop wasting time and get down to the business of finding <u>his killer</u>."</p>
<p><130> 「分かりませんが、ただ、私としては犯人は意図的にその場所を選んだと考えています。…」</p>	<p>(97) "We don't know," said Takemura. "But I, for one, am guessing that <u>the murderer</u> had some special purpose in leaving the body where he did. ..."</p>

「犯人」の主な働きは、特定な事件を起こした人を指示することであると考えられる。ほぼ同等な表現としては、英語の the perpetrator と the culprit があるが、「犯人」ほど多用されることはないようである。特定性を the によって明確にできるので、名詞の選択が日本語の場合より自由になると考えられる。上のように、犯罪の種類を明確にする名詞が一般的に使われる。

最後に、『朝日新聞』の記事の例を見よう。

車のそばに短銃男 現場で通行人が目撃 福岡の金融業者射殺【西部】

'96. 9. 6 朝刊 31頁 写真無 (全591字) [960906212]

福岡市早良区野芥二丁目の金融業脇田健二さん(四八)が自宅駐車場に入れかけた乗用車内で射殺された事件で、「現場から走り去った」という目撃情報のある作業服姿の男は、短銃を手に持って車のそばに立っていたことが福岡県警の調べで五日わかった。

捜査本部によると、男は事件があった二日午後四時二十分ごろ、脇田さんの家の近くで通行人に目撃された。目撃情報では、男は緑色の作業服を着て同じような色の野球帽型の帽子をかぶっており、近くの路地を行ったり来たりしていたという。

そこに脇田さんがちょうど車で帰宅した。脇田さんはいったん車を降りて駐車場の門を開け、再び車に戻って後退させながら車庫入れし始めた。その直後に銃声が一回響いた。目撃した通行人は少し離れたところにいて発砲の瞬間は見ておらず、銃声とは気付かなかったが、脇田さんの家の前に移動していた男が黒い短銃を握っているのを見た。男は小走りで現場から逃げたように記憶しているという。

また現場近くにいた別の男性は、「かなり大きな破裂音のような音が一回響いた。救急車が来たので見たところ、車は駐車場の前で止まったままで、テールランプを壁にぶつけていた。脇田さんは車の中でぐったりしていた」と話した。

捜査本部には「銃声を複数聞いた」との情報も寄せられているが、「一回」の方が多いため、捜査本部は犯人は一発だけ発砲して逃走したとの見方を強めている。

この例では「現場」が三回使用され、「駐車場の前」とほぼ同じ場所を指示するのであるが、「現場」は「駐車場の前」よりもこの「殺人事件フレーム」との関連が明確になる。この記事の英訳は存在しないが、この場合はすべて the scene と訳されても不自然ではないと思われる。

さらにこの事件の犯人と思われる不審人物の様子と動きはかなり詳しく述べられている。最初は「『現場から走り去った』という目撃情報のある作業服姿の男」といい、読者にとって未知の人物について多くの情報を与え、この事件との関わりを推測可能にする。この場合「犯人」が使われないのは、この「男」が実際犯人であるということがまだ立証されていないためであると考えられる。興味ぶかいことに、最後の段落に言及される「犯人」は、「作業服姿の男」と同じ人物であると推定されるが、厳密に言えば、「犯人」と「男」の間に前方照応関係は生じない。これは「犯人」という名詞が直接「殺人事件フレーム」をアクセスするためである。

一方英語では、このような記事における「犯人」は the assailant と訳されることが普通と思われる。しかし、筆者の感覚では、英語で同一人物を指示する表現がかなり自由に置きかえられるので、前方

照応関係が生じやすくなる。これで、目撃された不審人物と真犯人との厳格な区別が難しくなるのではないかと思われる。

おわりに

本研究では、「特定性」と「認知レベル」との関わりを探った。日本語では定冠詞の *the* に相当する形式がないので、Gundel 他 (1993) の枠組みの「特定可能」以上のレベルを文法的な手段によって表すことができないことがある。しかし一方、認知フレームとの関わりを明確にする名詞の使用により、英語の *the* の機能のある程度カバーすることができるようである。このような仮説を裏付ける資料を紹介したが、これから厳密な調査が必要になる。

参考文献

- Epstein, Richard. 1997. "Roles, Frames and Definiteness". *Discourse Studies in Cognitive Linguistics: Selected Papers from the Fifth International Cognitive Linguistics Conference*, ed. by Karen van Hoek, Andrej A. Kibrik & Leo Noordman, John Benjamins, Amsterdam.
- Fillmore, Charles J. 1982. "Frame Semantics". *Linguistics in the Morning Calm*, ed. by The Linguistic Society of Korea, 111-138. Seoul, Hanshin.
- Gundel, Jeanette K., Nancy Hedberg, & Ron Zacharski. 1993. "Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse". *Language* 69: 2. 274-307.
- Lyons, Christopher. 1999. *Definiteness*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Tawa, Wako. 1993. "Interpretation of definiteness: with special reference to Japanese". *Word* 44: 379-396.

用例

- 内田康夫著、1982. 『戸隠伝説殺人事件』徳間書店。
- Selis, David J. 訳 1994. *The Togakushi Legend Murders*. Charles E. Tuttle.
- 松本清張、『点と線』新潮文庫。
- Yamamoto, Makiko, & Paul C. Blum, 訳 1970. *Points and Lines*. Kodansha International.